
幻想の肖像

ホットココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の肖像

【Nコード】

N2677P

【作者名】

ホットココア

【あらすじ】

ロシアの伯爵の子として、革命の難を逃れ、アメリカへ渡ってきた兄ロランとナターシャ。

二人は幸せな毎日を送っていたが、ロランが16、ナターシャが15歳になったとき、父は初めてナターシャの出生の秘密を明かす…。そして母の肖像画には…。

二人の歯車が狂い始めたのは、このときからだった。

第一話 古き回想のプロローグ

古びた書斎にかけてある一枚の肖像画。

寂しげにかける青灰色の目。

金色の頭髮の上でロシア帝政時代の冠が光を放っている。

ほりの深い顔。

不幸な過去を思わせる表情。

今思えばそれは私と兄のロランの——すべての不幸と物語のはじまりだったのかもしれない。

『忘れたい、でも忘れたくない』

母の残した言葉の意味がやっと分かったとき、私とロランはすべてを知りすぎていた。

ロシア元貴族の、忌まわしい革命の歴史。

母の記憶に巣くった悪意の塊と、明かしてはならない秘密。それらを絵として描いた画家の思い。

私とロランに隠された真実。

ひた隠しにされた愛する母の消息。

何もかもを知りたがった私の前に立ちはだかったのは歴史の闇だった。それが私をこんなにも成長させたのかもしれない。

もし、時間を巻き戻せるとしたら私は一体どこに戻るのだろう。

そう考えながら、今私をこれからこうと思う。

そしてどうか、これを読み終えたあと、悲運な母のために祈って欲しい。老いぼれた私の貧弱な祈りでは、死後も母を幸せにすること

はできないだろうから。

愛する母へ

貴女の堅く禁じられた秘密を明かすことを許してほしい。
すべては、

貴女の魂を悲しみの記憶から解放するために――。

それからロラン。

私はあなたを愛していた。

それは一生涯忘れることのない永遠の愛だったと、今この
場をかりて誓いたい。そして、あなたの魂がまだ私を忘れていない
ことを、願ってやまない。

第二話 渡米

突然の揺れに、私は深い眠りから目覚めた。

私は乳母のアンナのそばのベッドにいた。

体中のあちこちに新調のシーツのにおいがしたので幼い私にも長時間眠っていたことが分かった。

「アンナ…、ここはどこ？」

アンナも眠っていたようだったが、私の声に気付いて目を開けた。

エメラルドグリーンの目が、心なしに濡れて揺れ動いていた。「あ…ナターシャさま…」

私はまわりを見渡した。

船室のようだ。広い部屋になっていて、アンナは白いソファに腰掛けている。となりの小さなベッドには兄のロランがすうすうと眠っていた。さっきの揺れは大きな波がぶつかったからかもしれない。アンナが目をごすりながら微笑んだ。

「お船の中でございますよ。お嬢様。長い間お眠りになられていたので覚えていませんか？」

ええ、と私はうなずき、それから体を起こしてアンナを振り向いた。

「私たちはどこへ向かっているの？」

「平和な国へですね。暖かくて、ロシアのように寒くないところへ」

「ロシアはどこへ行ってしまったの？」

「どこって……」

アンナが困ったように首をかしげた。

「何時間も前にロシアを起ちましたから、もうずいぶん遠くにあると思いますよ」

私はとたんに不機嫌になった。

祖国を捨てるなんて、父さまが許さない。祖国を捨てるのは、命を捨てるようなものだと言っているのを、アンナは知らないのだろうか。

「ロシアを捨てるつもりなの？」

厳しい口調で問うと、アンナは表情をくもらせ、目を伏せた。

「そうではありませんわ……ただ……」

「父さまに会わせて。父さまは祖国を捨てるのは下劣だといつもいつてらしたわ。そんな父さまが私とロランを連れて船で異国へいくなど信じられない」

「でも、お嬢様。伯爵は男爵や子爵と話しておいでです」

「それでもいくわ」

「お嬢様……」

私はベッドから降りると、ロランのベッドへ近づき寝顔を見つめた。
「お兄さま、寝てるのね」

「私、これから父さまのところへ行くわ。行って確かめてくる」

「ナターシャさま…！」

アンナが私を引き留めようとしたけれど、私は扉へ向かって外へ出た。暗い廊下が私を怖がらせたけど、父さまを見つけるまでは後戻りはしないつもりだった。

たくさんある船室の中で唯一灯りがともっている部屋を見つけたので、私が耳をすましてみると中から人の声がした。

「アメリカでは、我々を歓迎するだろう」

タートフ子爵の声がする。それからクリフト男爵の声もだ。「だといいが」

「ロシアの亡命貴族を歓迎したところで、一体何の利益があるのだ？」

「だが長年の友もいる」

父さまの声だ！私はすぐにさま音高く飛び込んだ。だが三人の雰囲気を見ると、それを控えるべきだったのかもしれない。「父さま！！！」

フランス製の古いテーブルをかこんで、三人がこっちを向いて驚い

たような表情を浮かべた。だけどすぐさま父さまは微笑を浮かべながら近づいてきた。

「ナターシャ、ロランとともに寝てたのではないのかね」

私は抗議するような口調で返した。

「父さま。なぜロシアを離れたの？」

父さまの目にありありと困惑の色が浮かぶ。

「それはね…ナターシャ」

私は大きな父さまの手をつかんだ。

「君たちを、守るためなんだよ」

「守る？どうして？君たちって私とロランなの？」

「お嬢様、伯爵は疲れています」

タートフ子爵が口をはさんだ。私は彼をキツとにらみつけると父さまに向かって口を開こうとした。そのとき背後の扉がひらき、ひどく慌てたようなアンナが入ってきた。

「申し訳ございません。伯爵さま！」

父さまのこわばった顔がやわらいだ。追いつめられた犯人が、危機一髪助かったような顔をしている。すると私のちいさな体がフワリと持ち上げられ、アンナに手渡された。父さまは私の金髪にキスをする、笑顔になった。

「おやすみ。ナターシャ。明日の朝に会おう」

明日の朝？今は夜なの？

私は部屋中に視線を走らせたが、時計はなかった。アンナが耳元でささやいた。「お嬢様、勝手に部屋をでてはいけませんわ。さあ、ロランさまもいますから、戻りましょう」

父の視線を背中に感じていたが、私はアンナに扉を閉められ、振り向くことができなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2677p/>

幻想の肖像

2010年12月3日03時54分発行